酒々井町伊篠白幡遺跡出土の土製品について

宮　城　孝　之

はじめに

以前、千葉県印旛郡酒々井町伊篠白幡遺跡の報告書作成に携わったことがある(註1)。この遺跡から出土した遺物の中に特異な形態の土製品が11個体出土しており、「特殊土製品」として報告した。報告書刊行以後折りに触れ類例を探してみたが管見にふれるものは少なく、この土製品の時期・分布等はよくわからないままである。数少ない出土例を紹介し、その特徴について考えてみたい。

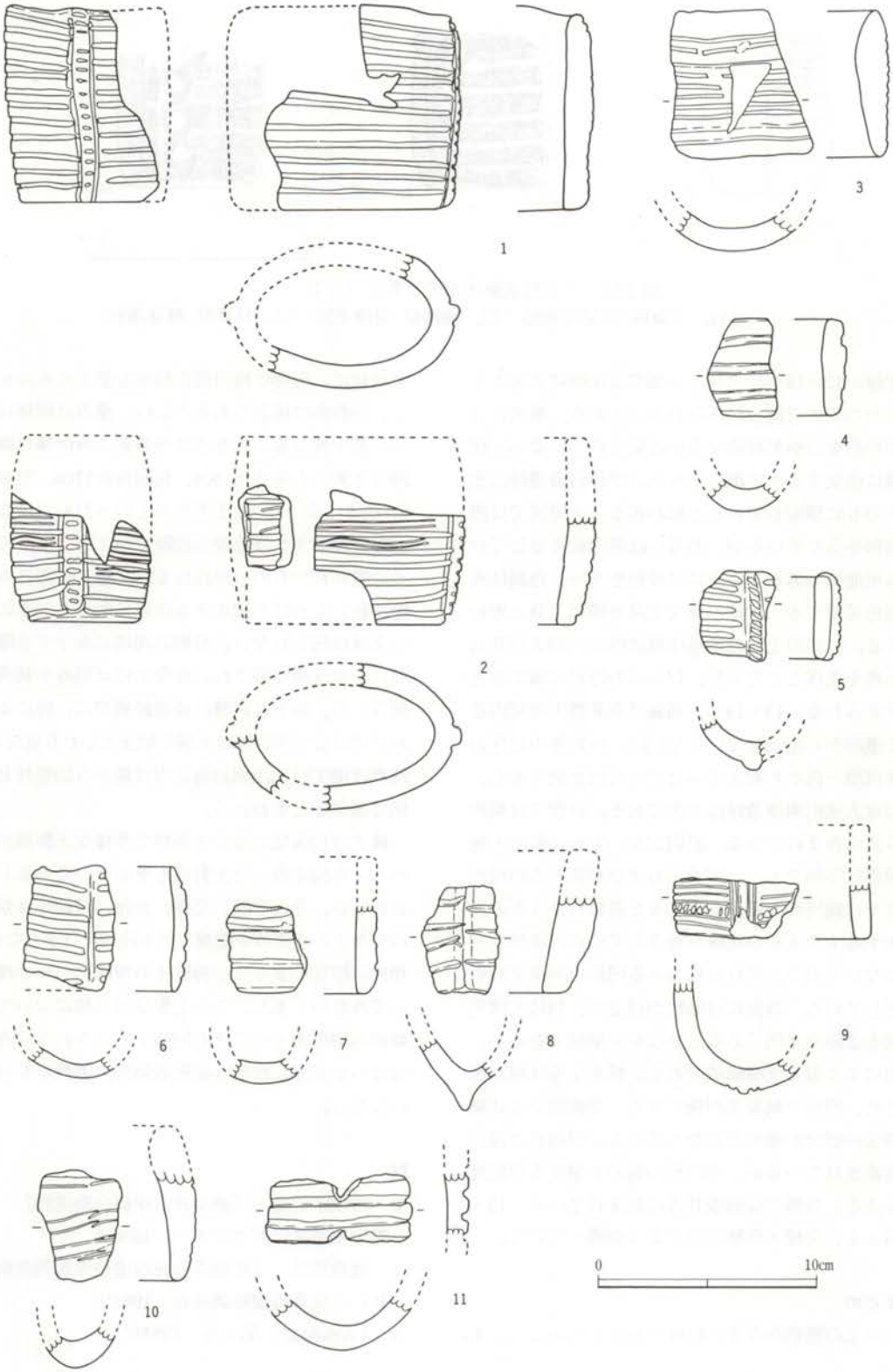
伊篠白幡遺跡出土の土製品

第1図が伊篠白幡遺跡から出土した土製品である。全部で11個体分あるが、完形品は1点もなく、1・2が最も遺存のよいものである。図のように置いた場合が最も安定しており、2個体とも図の下の面が平らになっている。製作ないし乾燥が図のような状態で行われたためと思われるが、これが用途を直接反映したものか否かはわからない。2個体とも胎土・焼成・色調が極めてよく似通っており、出土地点もほぼ同一地点といってよい。2個一対であることも考えられる。1は約2分の1が残存している。全体の形態は、楕円状の筒形を呈し、楕円の長軸端に刻目を伴う隆帯が貼り付けられている。長軸端以外の外面には横走する沈線がほぼ等間隔に施されている。沈線の施文工具は太い半截竹管状の工具を使用し、同時に二本の沈線が施文されている。残存する部分の高さは10.6cmである。胎土は少量の砂粒を混入する。焼成は悪くはないが暗茶褐色を呈する。2は1に比べ遺存はよくないが、長軸両端の破片がありおおよその形態を推定し得る。長軸の長さは約11cm、短軸約6.7cmを計る。1と同様に長軸端に刻目を伴う隆帯が施され、外面には横走する沈線がほぼ等間隔に施されており、施文工具も同様の太い半截竹管状の工具を使用している。1・2の異なる点は2には太い沈線の間に細い半截竹管状工具による二本の沈線が施されている点である。3～11はみな小破片で全形を知り得るものはない。3は太い半截竹管状工具によって平行沈線が施される。厚みは一定しない。高さは6.8cm。4は1/3分割に近い半截竹管状工具による浅い沈線である。明瞭な二本の沈線までにはいたっていない。高さは4.6cm。5は隆帯に斜めの刻目が施されている。横走する沈線は太い。施文工具は棒状工具である。高さは4.2cm。6は長軸端が隆帯でなく、浅い垂下する沈線が施されている。横走する沈線は竹管状工具による。高さは5.9cm。7は棒状工具による沈線である。8は長軸端を隆帯状につまみ上げている。沈線は先端のやや尖った棒状工具で施文している。9はやや遺存がよい。LR単節縄文が施されているようだが、はっきりしない。沈線は半截竹管状工具によって施されている。10は長軸端の破片と思われるが、隆帯などは施されていない。横走する沈線は半截竹管状工具による。11は竹管状工具によって太い横走沈線が施される。

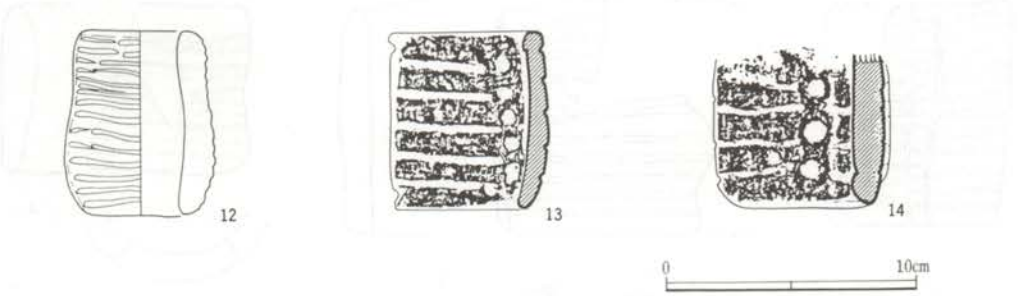
以上が伊篠白幡遺跡から出土した土製品である。その特徴をみると、形態は楕円形の筒状を呈する。外面に施される文様は横走する沈線を主体としており、装飾性の高い文様ではなく、単純なものである。文様構成に強い規制がはたらいているのかもしれない。施文工具は半截竹管状工具または棒状工具を使用している。長軸両端に垂下する隆帯を伴うものが多く、沈線のものもある。時期は、報文中では縄文時代後期としている。胎土・施文工具・焼成の状態および伊篠白幡遺跡から出土した縄文土器の主体が堀之内式土器に限られることから、出土した土製品を堀之内式期と考えてもよいと思われる。また、文様やその施文方法などの点からも、堀之内式期が妥当でないかと思われる。

他遺跡出土の土製品

第2図12～14が伊篠白幡遺跡出土例に類似した土製品である。12は千葉県佐倉市吉見台遺跡例である（註2）。報文には「土管状の土製品である。



第１図　伊篠白幡遺跡出土の土製品（1/3）



第２図　その他遺跡出土の土製品（1/3）
（12，千葉県 吉見台遺跡　13，福島県 南澤遺跡　14，福島県 越巻遺跡）

沈線が12～14本めぐり、一部では沈線に直交するかたちでナデ消しがみられる。」とある。報文には完形品なのか欠損品なのかは記されていない。沈線に直交するナデ消しがあり、伊篠白幡遺跡出土例の６に類似していると思われる。実測図では円筒形を呈しているが、あるいは楕円状を呈している可能性もある。胎土には砂粒を含み、色調は灰褐色を呈する。沈線の施文工具は棒状工具と思われる。12が出土した地点は堀之内式～加曽利Ｂ式土器を主体としており、12もこの時期に属すると考えられる。13・14は、福島県双葉郡大熊町内の２遺跡から出土している（註３）。いわき市在住の馬目順一氏から教えていただいた出土例である。13は大熊町南澤遺跡出土例である。分類では綱取II式に含まれている。説明がないため、胎土・焼成等は不明である。実測図および写真から円筒形または楕円形の筒形を呈すると思われ、５本の横走するやや太めの沈線が施されている。隆帯などはないものの、それに相当する円形の刺突文が垂下している。表面には砂粒が目立つ。14は大熊町越巻遺跡出土例である。やはり欠損品であるが、13によく似た文様構成である。横走する沈線が施され、円形の刺突文が垂下する。実測図からは刺突文の部分が隆帯状になっている。円筒形に復元実測されているが、楕円形の筒形を呈する可能性もある。分類では綱取II式に含まれている。13・14とも、文様・形態の点でよく似通っている。

まとめ

以上の諸例からその特徴を抽出してみたい。まず最初に、形態は楕円形の筒形を呈するものが多く、円筒形の場合もあるらしい。厚みは個体によって若干異なる。大きさは今のところ伊篠白幡遺跡の２例から高さ10.6cm、長軸長約11cm、短軸長6.7cmを上限とする。上下左右といったものはないが製作段階または乾燥の段階で第１図１・２のように置かれたものと思われる。文様は外面のみに施され、もっぱら横走する沈線に限られ、その他の文様は施されない。長軸の両端に垂下する隆帯ないしは沈線が施され、隆帯上には刻みや刺突が施される。胎土は伊篠白幡遺跡例では、特によいわけではなく同時期の土器の胎土とかわりはない。時期は縄文時代後期の堀之内式期から加曽利Ｂ式期に属すると思われる。

縄文時代後期になると各地で多様な土製品が現れる。本稿で扱った土製品もその一つであると思われるが、その形態、文様、分布、時期等は類例の少なさから実体を把握できる段階にはまだない。類例の増加をまって、再度その特徴について検討してみたい。また、この土製品の名称についても類例の増加をまってその特徴から付されるべきではないかと思われる。研究者諸氏の御教示をお願いしたい。

註

1　宮城孝之他　『酒々井町伊篠白幡遺跡』㈶千葉県文化財センター　1986年
2　近森正他　『佐倉市吉見台遺跡発掘調査概要II』　佐倉市遺跡調査会　1983年
3　『大熊町史』第２巻　1984年